

◇ホルマン：4つの小品（子守唄/バレエア/何故？/マズルカ）

ホルマン(1852～1926)

サン＝サーンスと交流が深かったホルマンのオリジナル作品や献呈された曲を含む1000点以上の楽譜が、今、和歌山の南葵音楽文庫にあります。この文庫は「音楽の殿様」紀州徳川家16代当主だった徳川頼貞(1892～1926)が莫大な私財を投じて集めたコレクションで、頼貞は1923年にホルマンを日本へ招聘しています。

◇シューベルト：アルペジオーネソナタ イ短調 D.821

シューベルト(1797-1828)

アルペジオーネはウィーンのギター製造者により発明された6弦の弦楽器で、チェロとギターの特徴を併せ持ち、「ギター・チェロ」という別名でも呼ばれていました。「アルペジオーネ・ソナタ」は、1824年シューベルトによって、まさしくアルペジオーネのために作曲されたソナタでしたが、曲が出版された1871年にはすでにアルペジオーネは忘れられた楽器になっていました。シューベルトの最晩年に作曲されたこの音楽には、美しい叙情性に彩られたシューベルトならではの世界に色濃く「死の影」が刻み込まれており、その「悲劇性」もまた多く人々の心を捉える要因となっています。

◇ダンボア：月光/ボストン/タンゴ/グリーン/吟遊詩人の歌

ダンボア(1889～1969)

リエージュ音楽院を卒業。ヴァイオリニストのイザイとトリオを組んでいました。学生達にベルギーのチェリストの作品に興味を持たせるよう、ブリュッセル音楽院でも指導していました。

◇セルヴェ：オカラメモリアによるファンテジーとヴァリアシオン 作品17

セルヴェ(1807～1866)

ブリュッセル音楽院で1等を最初に得た人で、想像できない程の演奏旅行をこなし、この時代の最高のチェリストとして尊敬され、ベルギー音楽院の教授でベルギー楽派を発展させ「チェロのパガニーニ」と呼ばれていました。

*ホルマン、ダンボア、セルヴェの解説は、「ベルギー楽派のチェリスト達」(2018.10.4 林 裕チェロリサイタル プログラム)より転載いたしました。